

芭蕉は、憧れていた李白などの古人のように旅に出て俳諧をきわめる決意を句に表した。旅で死んでも構わないという覚悟や家を譲ることで人生を俳諧に捧げるつもりだったのだと思う。

そんな芭蕉は**かっこいい**と思った。何かをきわめるために自分の持っているものを捨ててまで**夢中になってきわめよう**と思っ**たことはない**から、そう思えるくらいのもを見つけないと思っ**た**。

**憧れや尊敬を抱いていた古人**のように俳諧をきわめたいという思いだけで、家を譲り、準備をして旅に出たところから、俳諧をきわめるための**覚悟**や死んでも構わないという**強い思い**があったと思う。

昔の人に憧れて、自分が死ぬまで何かに捧げるということは**到底できない**ので、それができる芭蕉はすごいと思った。そういった覚悟があるからこそ、**今も残るよい句**が作れたのだと思う。**歌枕を自分の目で見えて自分で句を作りたい**という強い思いがあったからこそ、旅を続けることができたのではないかと思う。

自分が尊敬している古人たちの**生き様に憧れ**を抱き、自分も旅に出たい、**俳諧を究めたい**という気持ちや、自分の生涯を**俳諧にささげる**という強い思いが句に表れている。

**命を燃やして情熱を注ぐ**ことがすごいと思う。芭蕉の思いの強さと俳諧を究めるとい**うまっすぐな気持ち**を僕ももちたいと思**った**。

芭蕉は、平泉に**栄光や功名のあと**を期待していたけど、何もなくなっていて、今も**あり続ける自然と比較して、人の力のはかなさ**を、**切なく**感じていることがわかった。

私は、どこかに行っても芭蕉のように**深い考えをもつこと**はないので、そんな見方もあるのだなと思った。私たちのように軽い気持ちで行くのは違い、**歴史や人の心、世の理**のようなものを見ているのだと思い、**そんな考え方を尊敬**しました。

芭蕉は、憧れている義経や藤原氏の残した**栄光や面影**を期待していたが、あるのは**自然のみ**だった。大きな時の流れの中で**風化せず**に**生き続ける自然の大きさ**を前に、人間がつくったものは**無力であり、はかないもの**であることを感じた芭蕉は涙を落とした。

僕は、**がっかりするだけ**だけど、芭蕉は義経を含む古人への**尊敬**や**あこがれ**が**比べものにならないくらい強い**から、それが見えなくて、**自然だけが残っている平泉に感情があふれた**のだと思う。もしかしたら「**自分の残したのも・・・**」と思ったんじゃないかなと思う。

芭蕉は、**義経や藤原氏の栄光**が残っていない、消えてしまっていることを「**夢の跡**」という句に残しているのだと思う。そして、涙を流していることから、**自然が昔のまま変わらないのに、人の残したものは消えてしま**うは**かなさに切なく**思っている。

私が同じ場面にあったとしても、少し**ショック**を受けるくらいだと思う。芭蕉は、**変わらないものと変わりゆくものを感じて、涙**で**できる**ほど考えられることはすごいことだと思う。

芭蕉は、人の力のはかなさを知った後に、光堂の美しさを見て、**人の力の強さに感動**したとわかった。また、光堂を残そうとした**人の力に感謝**している気持ちがあったと思う。

僕だったら、その**美しさを句にしたい**と思う。でも芭蕉は、これを残そうとする人の力に価値があると感じている。**物を見る時の視点が違うのだ**なと感じた。

芭蕉は、人の力で守った光堂の輝きを見て、**人の力の強さに感動**したことがわかった。人の力で守ることができたことをうれしかったのだと思う。その喜びと光堂の美しさを「**降り残してや**」と表すほど感動していたのだと思う。

私なら、**美しさだけに感動**したと思うけど、芭蕉はこれまでに**色々なものを見てきたので、私達にはない感じ方**をしているのだと思います。

芭蕉は、光堂を見て、人が守ってきた美しい光堂を「**降り残してや**」というほどに**その美しさに感動**していたことが分かった。また、人の力によって守られるものもあるのだということを感じ、**うれしく思っていた**と思う。

芭蕉は、見ただけのもを目に写しているのではなくて、**その根底にあるものや奥深くにあるものを写している**のだと思った。